幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育動画作成の効果

－児童文化財を用いた教材の作成と活用－

水　野　恭　子

研究紀要第 54 号　抜粋

岡 崎 女 子 大 学
岡崎女子短期大学

令和 3 年 3 月 15 日発行

【研究論文】

幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育動画作成の効果
―児童文化財を用いた教材の作成と活用―

水野　恭子*

要　旨

保育内容演習（健康）の課題として児童文化財を用い、幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育動画作成をするように提示し実施した。模擬保育動画作成後の振り返りアンケートを実施し、事後の省察によって様々な課題が記述された。そこで、本研究では、児童文化財を用いた模擬保育動画作成と振り返りによって、学生にとってどのような省察の視点が得られたのか、幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育動画作成の効果について検証することを目的とした。「模擬保育を実践してみての自己課題」について分析を行った結果、「ペープサートを演じること」「子どもがいることを想定して演じること」の記述が多く見られた。模擬保育動画作成の効果として、事後に繰り返し見られることから客観的に実践を振り返ることができる反面、幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育を実践する難しさがあることも示唆された。

キーワード：模擬保育動画　応答的な関わり　ペープサート　省察　保育実践力

Ⅰ．はじめに

2017年に教職課程コアカリキュラム（文部科学省，2017）が策定され、教職課程の各事項について、「全体目標」、「一般目標」、「到達目標」として表され、教職課程における教育内容についても規定された[1)]。幼稚園教諭養成課程における保育内容の指導法に関する科目において、全体目標として「幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された当該領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける」ことが示された[2)]。また、到達目標の一つとして、「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」という模擬保育を取り入れた授業方法についても具体的に示された[3)]。

猪田ら（2019）は、保育実習の事前指導として模擬保育を導入し、模擬保育の意義を考察した研究では、模擬保育の気づきとして、「指導案作成の視点」、「保育者役の視点」、「子ども役の視点」、「客観的な観察者の視点」、「模擬保育後の振り返りの視点」から具体的な学生の気づきについて明らかにしている[4)]。模擬保育の省察の方法として動画で映像を見た学生の自己省察の視点について坂本（2015)は、自分の姿を客観的に見ることで、自己の課題を多様な視点を得ていることを明らかにしている[5)]。また、模擬保育のICT活用の利点について、中原ら(2016)は、①動画の反復視聴による学習の質向上の可能性、②指導案との比較による「ねらい」の理解とねらいが達成できないときの振り返りの教材としての有用性、③多様な視点から模擬保育を見ることができるといった研究結果を明らかにしている[6)]。

筆者は本学の卒業年度の学生の保育職へのキャリア支援として昨年度と今年度、保育実技対策講座を複数回担当した。児童文化財（ペープサート）を活用した模擬保育の経験のある学生は意外に少なく、学生からも児童文化財を活用した実践方法についてもっと学びたいとの意見も耳にした。

ペープサートは、紙の操り人形の劇場と呼ばれ、基本人形、活動人形、景画、活動景画の4種類あり、紙に描いた絵を竹串の両面に貼り、それらの人形を移動させたり、反転・転画しながら展開される紙人形である。保育現場では、子ども達が自分で作って演じることもあるが、保育者としてペープサートを

*岡崎女子大学

活用するには、制作から実践まで教材研究を行い、演じるために保育技術を要する児童文化財の一つである。

このように教職課程コアカリキュラムによる保育内容の指導法に関する科目に求められる内容や本学における学生のニーズなどから、今年度の保育内容の指導法の授業において積極的に模擬保育を位置づけ授業計画を立てた。

しかしながら、今年度は新型コロナウィルス感染症拡大の影響を受け、「保育内容演習（健康）」の対面授業で計画をしていた児童文化財を用いた模擬保育の実施が難しくなり、その代替案として課題の内容は変更せず、模擬保育動画作成へと変更を行った。対面授業では模擬保育の発表者を保育者役、参観者を子ども役と想定していたことから、模擬保育動画作成にあたり「子どもが目の前にいることを想定して応答的・対話的に模擬保育をすること」を意識して実践できるように遠隔課題を提示した。

模擬保育動画作成の授業アンケートより、模擬保育の内容について、様々な視点から省察する学生の記述が見られ、今回は動画作成としたことで学生が自分の実践について振り返る際に対面の模擬保育では得られにくい省察もあるのではないかと考え、今回の研究テーマの着想に至った。

学生の学びを可視化すると共に、模擬保育動画作成の効果を検証することで、学生の教材研究力や保育構想力、保育実践力の課題を洗い出し、保育現場で求められる保育実践力の向上に寄与することができる授業実践の改善につなげていくことができるのではないかと考えた。

したがって、本研究では、学生の模擬保育動画作成後の模擬保育の振り返りから、児童文化財を用いた幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育動画作成の効果を検証することを目的とする。

Ⅱ．模擬保育動画作成の課題概要

１．授業計画

模擬保育動画作成の課題の取り組みに関連する授業について、以下の手順で実施した。第 12 回の遠隔課題として「園での健康管理」の遠隔課題と共に、「模擬保育の課題の提示について」配信を行い模擬保育の構想を考えられるようにした。第 13 回「模擬保育(1)」の遠隔授業として、「模擬保育の計画と準備・教材制作・実践練習」を各自行うとした。第 14 回「模擬保育(2)」では、模擬保育の動画を教員の PC へアップロードを行った。第 15 回に「模擬保育の実践の振り返り」とし、Microsoft Forms を用いた授業アンケートを行った。

２．模擬保育課題の内容

模擬保育の課題の内容として、「手遊びの 1 番とペープサートを使って演じる」ことを条件とし、健康に関する内容である①手洗い、②うがい、③虫歯予防・歯磨き、④風邪予防、⑤食育の 5 項目の中から好きなものを選択することと、対象年齢の設定を 3 歳、又は 4～5 歳のどちらかを選択し、課題に取り組むように示した。ペープサートの条件として、表と裏を張り合わせ、割り箸等の棒で 4 本以上制作することとした。

３．動画撮影方法

①学籍番号、氏名を知らせる、②手遊び名と選択したテーマ内容、対象年齢を知らせる、③選択したテーマ内容で手遊びとペープサートを用いて模擬保育を行う。撮影範囲として、上半身が映るようにし、座って演じても、立って演じてもどちらでも良いことを伝え、撮影する背景はプライベートなものが映らないようにし、無地に近い方が望ましいことを伝えた。撮影時間については、3 分～4 分以内とした。

４．評価基準

評価基準の観点として、①ペープサートの制作が丁寧に行われているか、②子どもが理解できるようにペープサートを演じ、応答的・対話的に模擬保育を進めながらテーマ内容についての大切さを伝えられているかという点を事前に伝えた。

Ⅲ．研究方法

１．対象

「保育内容演習（健康）」の授業を受講した幼児教育学科第三部 3 年生の受講者 97 名。

２．調査実施期間

2020 年 8 月 17 日～2020 年 8 月 22 日。

３．手続き

遠隔課題の模擬保育動画作成、アップロード後の課題として行った授業アンケート「模擬保育の振り返り」について Microsoft Forms の質問項目に、今後の保育実践力向上のための研究の趣旨について説明し、同意を得た学生のみを対象とした。

４．調査内容

調査内容については、(1)これまでの授業での模擬保育の経験回数、(2)模擬保育の経験内容、(3)ペープサートを制作し演じた経験、(4)対象年齢、(5）手遊びからペープサートへの展開で特に意識した点、(6）ペープサートで演じる際の工夫や意識したこと、(7)実践した手遊び、(8)ペープサートのテーマ内容、(9)模擬保育の計画から制作、演じる練習、動画の撮影までかかった時間数、(10)模擬保育の課題で最も難しかった内容、(11)模擬保育を実践してみての自己課題、(12)模擬保育に取り組んだ感想についての 12 項目であった。

５．分析方法

調査項目のうち(1)、(2)、(3)、(4)、(7)、(8)、(9)、(10)については単純集計を行った。また、調査内容の自由記述のうち、(11）の模擬保育を実践してみての自己課題を中心に分析するため、(5)、(6)については分析対象から除外する。

(11) 模擬保育を実践してみての自己課題について、データのまとまりごとに意味付けを行い、カテゴリーに従って分類した。また、(11)、(12)の調査内容の自由記述から模擬保育の動画についての記述内容を個別に抽出し、分析を行った。

Ⅳ．結果及び考察

(1) これまでの授業での模擬保育の経験回数

これまでの授業での模擬保育の経験回数は、0 回が 21 人(22.6%)、1 回が 41 人(42.2%)、2 回が 17 人(17.5%)、3 回以上が 18 人(18.5%)であった。

(2) 模擬保育の経験内容

表 2.の結果から、模擬保育の経験内容では「手遊び＋絵本」が 26 人、「ペープサート」が 9 人、「手遊び＋パネルシアター」が 6 人、「手遊び＋エプロンシアター」が 6 人、「絵本」が 5 人、その他 40 人であった。その他の模擬保育内容としては、「手遊び＋スケッチブックシアター」、「紙皿シアター」、「手袋シアター」、「素話」等であった。（複数回答あり）

表 1.　模擬保育の経験内容

経験内容	人数	(%)
手遊び＋絵本	26	26.5
ペープサート	9	9.1
手遊び＋紙芝居	6	6.1
手遊び＋パネルシアター	6	6.1
手遊び＋エプロンシアター	6	6.1
絵本	5	5.1
その他	40	40.8
合計	98	100.0

(3) ペープサートを制作し演じた経験

ペープサートを制作し演じた経験について、「作ったり、演じたりしたことは一度もない」、「作ったことはあるが、人前で演じたことはない」、「作って、人前で演じたことが 1 回ある」、「作って、人前で演じたことが 2 回ある」、「作って、人前で演じたことが 3 回以上ある」から選択した結果を表 2 に示す。

表 2.　ペープサートを制作し演じた経験

ペープサートの経験度合い	人数	(%)
作ったり、演じたりしたことは一度もない	12	12.3
作ったことはあるが、人前で演じたことはない	21	21.6
作って、人前で演じたことが 1 回ある	37	38.1
作って、人前で演じたことが 2 回ある	24	24.7
作って、人前で演じたことが 3 回以上ある	3	3.0
合計	97	100.0

表 2 の結果から、ペープサートを制作し演じた経験については、「作って、人前で演じたことが 1 回ある」が 37 人と最も多く、次いで「作って、人前で演じたことが 2 回ある」が 24 人であった。「作ったり、演じたりしたことは、一度もない」と「作ったことはあるが、人前で演じたことはない」を合わせると、ペープサートを人前で演じたことのない学生は 33 人であった。

(4) 対象年齢

対象年齢については、3 歳 53 人（55%）、4・5 歳 44 人（45%）であり、大きな差はなかった。

(5) 実践した手遊びとペープサートのテーマ内容

表 3 の結果から、あらかじめ設けたテーマ内容 5 種類のうち、学生の選択した模擬保育の課題のテーマ内容は以下の通りであった。「虫歯予防・歯磨き」が 43 人と最も多く、次いで「食育」が 26 人であった。「うがい（ぶくぶくうがい・がらがらうがい）」が 2 名と少数であった。テーマ内容に対する手遊びについては、テーマ内容に関連した手遊びが大多数を占め、例えば「手洗い」のテーマで「手をたたきましょう」の手遊びを「手を洗いましょう」とアレンジして手洗いに合わせた手遊びを考えた学生も見られた。また、テーマ内容に関連した手遊びではなく、対象年齢に合わせたとみられる手遊びや「はじまるよ はじまるよ」等のペープサートを演じる前の導入を意味する手遊びも見られた。

表 3. 実践した手遊びとペープサートのテーマ内容の抜粋

テーマ内容	人数	手遊び名・その他
手洗い	12	手洗いのうた・手をたたきましょう（アレンジ）
うがい（がらがらうがい・ぶくぶくうがい）	2	うがいの歌
虫歯予防・歯磨き	43	歯を磨きましょう ネズミの前歯
風邪予防	14	ごんべさんのあかちゃん 手洗いうがいのうた
食育	26	やさいのうた おべんとうばこ
合計	97	

(6) 模擬保育の計画から制作、演じる練習、動画の撮影までかかった時間数

表 4 の結果から、模擬保育の計画の立案から動画の撮影までにかかった時間で「4 時間程度」が 39 人と最も多く、次いで「3 時間程度」が 25 人である一方で、「6 時間程度」、「7 時間程度」と答えた学生は全体の 2 割ほどで、学生による個人差がみられた。

表 4. 模擬保育の計画から制作、演じる練習、動画の撮影までかかった時間数

かかった時間	人数	(%)
3 時間以内	25	25.7
4 時間程度	39	40.2
5 時間程度	14	14.4
6 時間程度	11	11.3
7 時間以上	8	8.2
合計	97	100.0

(7) 模擬保育の課題で最も難しかった内容

模擬保育の課題で最も難しかった内容について、表 5 の結果から、模擬保育の課題で最も難しかった内容は、「お題の大切さを子どもにどのように伝えればよいか」が 28 人と最も多く、次いで「お題を想定して計画をすること」、「子どもがいることを想定して演じること」が 19 人であった。選択したテーマ内容や対象年齢から保育を構想したり、計画の立案をすることに苦慮したことが考えられる。

表 5. 模擬保育の課題で最も難しかった内容

内容	人数	(%)
お題の大切さを子どもにどのように伝えればよいか	28	28.8
お題を想定して計画をすること	19	19.5
ペープサートで演じること	15	15.4
ペープサートを作ること	2	2.0
子どもがいることを想定して演じること	19	19.5
手遊びすること	3	3.0
対象年齢の姿に合わせた実践内容や方法	11	11.3
合計	97	100.0

表 6.　模擬保育を実践してみての自己課題

カテゴリー	記述数	代表的な記述例
手遊びをすること	7	手遊びが得意では無いのであと半年でしっかり実演できるように訓練すること。就活試験や実習で評価されることもあると思うので自分が得意なものを数個用意することが大切だと思った。もう少し実技的なことを充実させたい。
		また手遊び選びも知っているものが少ないと出来ないので沢山レパートリーを作ります。
ペープサートを作ること	8	ペープサートは表裏両方を上手く使って、元々あったものから変わる面白さを伝えられる道具だと思います。なので変わる時の表現を分かりやすく伝えられるように次は工夫したいと思いました。
		ペープサートを作るのに予想以上に時間がかかってしまいました。現場に出てからは丁寧さも大事ですが、効率の良さも大事だと思うので製作活動に慣れていかなければならないと感じました。
ペープサートを演じること	32	ペープサートで登場人物の声色に変化があまりなく違いが分かりにくかったので、声色をもっと変えて、違いが分かるような演じ方を練習していくことが課題だと思いました。
		演技をすることが苦手なので、もっと練習して、子どもたちが話の世界に入り込めるようにしたいと思いました。
		新しいパネルを出したり、貼ったりしながらナレーションを読むと、作業に集中してしまいナレーションが棒読みになりがちだったので気をつけたいとおもいました。
計画を立案すること	12	手遊びからペープサートにいく流れが曖昧だったり、全体の内容が薄かったりしたので、計画性が足りなかったこと。
		子どもたちに興味を持って楽しみながらお題について知ってもらうためにはどのような環境構成や声掛けが必要なのかを考えるのが難しかったので子供の姿を思い浮かべ想定しながら案を立てること。
		子どもに伝えたいものは何なのか、それを伝えるためにどういったこだわりを持って教材制作や実践に取り組むのかを明確にする。子どもの姿から様々な反応などを予想し指導計画を立て、見通しを持った保育を行うこと。
対象年齢の姿に合わせた実践内容や方法	9	対象年齢を考えて実践内容や方法を決めるのが難しがったです。なので私にはまだ年齢ごとの発達を理解できていないと思ったのでもう一度各年齢ごとに発達を復習したいと思いました。
		対象年齢の子どもの様子がなんとなくしかも想像つかない点が課題で現場に行かないと月齢にも差があると実習で感じたため子どもの興味や発達が頭に入っていると想定して作りやすいと感じました。
子どもにテーマ内容をどのように伝えるか	17	子どもにどのように歯磨きの大切さを伝えれば良いのかがとても難しかったです。子どもたちに語りかけるようにしたり子供たちが自分たちで考えられるようにしたらもっと歯磨きの大切さを感じられると思いました。
		今回の模擬保育での自己の課題は、食べ物についての説明です。どのように話せば子ども達に伝わるのか、難しい話も噛み砕いて分かりやすく伝えるにはどうすればいいのかがとても難しくて、今後の課題となりました。
		本題に入るまでの導入がとても苦手で子どもたちに内容の大切さをどのようにすれば伝わるのかということ。
子どもがいることを想定して演じること	22	子どもがいない場所で演じることは難しく反応がない中どのように演じるか考えていくこと。
		子どもの姿をもっと予想しながら、子どもに対して応答的でありながら、話を進めていくこと。
		子どもの姿を予測することが課題だと思います。子どもに語りかけることを意識して行いましたが、子どもの姿をしっかり予測しきれていればもっと他に語りかけることができたと思います。

(8) 模擬保育を実践してみての自己課題

模擬保育を実践してみての自己課題について、自由記述より意味のまとまりごとに分類し、a.「手遊びをすること」、b.「ペープサートを作ること」、c.「ペープサートを演じる」、d.「計画を立案すること」、e.「対象年齢の姿に合わせた実践内容や方法」、f.「子どもにテーマ内容をどのように伝えるか」、g.「子どもがいることを想定して演じること」の 7 つのカテゴリーに従って分類した(表 6.)。7 つのカテゴリーについて以下に考察する。

a.「手遊びをすること」

自己課題として「手遊びをすること」の記述を考察してみると、「手遊びの種類を増やす」等の手遊びの実践できる種類を増やすという内容が一番多くみられた。今回は、健康の内容に関するテーマ内容の設定があったことから、学生自身が実践できる手遊びの中から得意なものを選択できなかったことも考えられる。また記述の中には、「就活試験や実習で評価されることもあるので、自分が得意なものを数個用意する」といった内容もみられ、模擬保育をすることによって、今後必要となる保育実技へと目を向けている学生もみられた。

b.「ペープサートを作ること」

自己課題として「ペープサートを作ること」の記述を考察してみると、「ペープサートは表裏両方を上手く使って」、「元々あったものから変わる面白さを伝えられる道具だと思う」といった記述から、ペープサートのもつ教材の魅力を捉えることや、演じる時のことを考えて、表裏の使い方、絵の描き方を考える等、ペープサートの教材研究の視点が述べられていた。

c.「ペープサートを演じる」

自己課題として「ペープサートを演じること」とした記述数は最も多かった。記述を考察してみると、「登場人物に変化をつけて演じること」や「キャラクターの使い分け」の記述が複数みられ、1 人で複数の紙の人形等を動かすため、役作りや演じ方を決めておかないと、「演じている途中に徐々に同じ声になってしまう」と答えていた。また、「新しいパネルを出したり、貼ったりしながらナレーションを読むと、作業に集中してしまい、ナレーションが棒読みになってしまった」という記述にみられるように、物語を語りながら、人形を動かしたり、展画を反転させたり、話をしながら複雑な動作も入るため、保育技術として要求されることが大きいといえる。

d.「計画を立案すること」

自己課題として「計画を立案すること」とした記述を考察してみると、「手遊びからペープサートの展開が難しかった」、「物語を自分で作ることが苦手」、「余裕をもって計画を立てること」、「子どもの姿から様々な反応を予想して指導計画を立案する」、「見通しを持った保育を行う」等の記述があった。動画の撮影時間は 4 分以内という限られた時間の中で、手遊びとペープサートの 2 つの児童文化財を取り入れながら、健康のテーマ内容を実践するという課題は、時間を計算しながら、手遊びとペープサートの時間配分、子どもに伝えたいことを厳選しなければならないことから、計画をしっかり立案することの気づきを得ていた。

e.「対象年齢の姿に合わせた実践内容や方法」

自己課題として「対象年齢の姿に合わせた実践内容や方法」の記述では、「対象年齢の子どもの様子が想像つかない」、「年齢ごとの発達の理解ができていない」といった内容がみられた。対象年齢は学生自ら選択する内容ではあるが、模擬保育を行う上で、「子どもの興味や関心を捉えること」や「発達の理解」が実践上の課題となることへの気づきがみられた。

f.「子どもにテーマ内容をどのように伝えるか」

自己課題として「子どもにテーマ内容をどのように伝えるか」の記述では、「歯磨き」、「虫歯」、「食育」についてのテーマ内容の伝え方について「何を伝えたいのかわからなくなった」、「難しい話もかみ砕いて伝えるにはどうしたらよいか」という記述がみられた。また改善する方法として、「一番伝えたいことを考える」、「伝えたいことだけをまとめておく」、「子どもに語りかけるようにゆっくり話す」という記述が見られた。学生はペープサートを演じることで気持ちの余裕がなく、テーマ内容について何を一番伝えたいのか考えて、言葉を吟味しておくことが課題

として挙げられた。また、テーマ内容の伝え方として、伝えるだけではなく、例えばペープサートの登場人物を増やし、虫歯になった時の状態を具体的にペープサートを使って見せながら知らせることでテーマ内容の大切さを伝えるという改善点も見られた。

g.「子どもがいることを想定して演じること」

自己課題として「子どもがいることを想定して演じること」の記述数は、「ペープサートを演じること」に次いで多かった。記述内容については、子どもが目の前にいるわけではないため、「視線の向け方や声の大きさがわからない」という感覚があり、「子どもが見やすいようにペープサートはもう少し低い位置で持つ」、「後ろの子どもまで聞こえるように声をもっと大きくする」など、実際の子どもの姿を想定した場合の環境構成や人的環境としての保育者の在り方についての記述もみられた。また、「子どもとの応答的な関わりを意識することが難しかった」という内容が多く見られた。例えば、記述には「子どもの反応をもう少し受け止め、子どもがどんなことを言っても対応できるようにすることが必要」、「子どもがいない場面でもいるように想像して演じたい」、「子どもが前にいないとスムーズに進めてしまうが、実際は違うため、しっかりと予測しながら演じていきたい」との記述が複数みられた。

今回の模擬保育では実際にはカメラの前で行う条件の中で、よほど子どもの反応を考えたり、想像したりしないと、模擬保育で意識することが難しいことが考えられる。

Ⅴ．まとめ

本研究では、幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育動画作成の効果について、模擬保育後の授業アンケートから分析した。模擬保育動画による振り返りは、学生の記述にも多数見られたように、客観的に自分が演じているところを繰り返し見ることができることで、目線が下がることや表情の乏しさ、笑っているつもりが無表情に見えるといった自己認識につながる視点を得ていた。しかし、今回焦点を当てた幼児との応答的な関わりを意識した模擬保育の動画作成においては、目の前に子どもや子ども役となる学生の不在により、応答的な関わりを意識する教材としての動画の活用は難しさを伴うことが示唆された。今後の課題として模擬保育における振り返りの方法として効果的な動画の活用について検討していく。

付記

本研究は、令和 2 年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査の承認を得て実施した(通知番号 67)。

引用文献

1）文部科学省（2017）『教職課程カリキュラム』、pp.1－8
2）前掲 1)
3）前掲 1)
4）猪田裕子・久保木亮子・塩津恵理子(2019)「保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察(2)」『教職課程・実習支援センター研究年報(2)』、pp.3－13
5）坂本真由美(2015)「模擬保育を通した自己省察の試み」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第 47 号、pp.111－116
6）中原大介・坂本毅啓・佐藤貴之(2016)「保育者養成教育における模擬保育用動画教材の形式的評価」、第 41 回情報システム情報学会全国大会講演論文集、pp.317－318

謝辞

本論文執筆にあたり、本研究にご協力いただきました幼児教育学科第三部の 3 年生の皆さんに感謝申し上げます。